

領域番号	1802	領域略称名	パレオアジア
研究領域名	パレオアジア文化史学—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究		
研究期間	平成28年度～平成32年度		
領域代表者名 (所属等)	西秋 良宏（東京大学・総合研究博物館・教授）		
領域代表者 からの報告	<p><u>(1) 研究領域の目的及び意義</u></p> <p>約20万年前のアフリカ大陸で誕生したホモ・サピエンス（新人）は、10～5万年前頃以降、ユーラシア各地へと拡散し、先住者たる旧人たちと「交替」した。日本列島人の直接の由来とも関わるこの人類史的事件の原因や経緯の研究は、人類学・考古学諸分野において最も注目されるテーマの一つであり続けている。本研究は、絶滅人類が生息していた頃のアジア（略称パレオアジア）において新人がいつ、どのように拡散し定着したかを文化史的観点から説明しようとするものである。それをもって生物学やヨーロッパの証拠に偏向した昨今の研究動向に一石を投じ、より総合的な人類史を構築する。</p> <p>具体的には、次の点を目的とする。</p> <p>(1) 新人の身体的起源はアフリカにあるが、彼らの特徴付ける文化もアフリカに起源したとは限らない。アジア各地における初期新人文化と、その形成プロセスの特性を野外調査等、実証的研究によって明らかにする。</p> <p>(2) プロセスは地域によって多様であった可能性がある。そのような多様性が生じた背景や原理を理解するため、遺跡、遺物だけでなく分析科学や現生民族誌等から得られる多様な証拠も加味した理論モデルを構築する。</p> <p>本研究は新人文化の由来をアジアの証拠をもって論じるという人類学・考古学的意義を有するだけでなく、文化史現象の数理的説明、すなわち人文科学と数学の融合という新領域創出にも貢献する。</p>		
	<p><u>(2) 研究成果の概要</u></p> <p>本領域の出発点は、新人の拡散と各地における新人的文化の発現時期が一致している地域と一致していない地域がある、アジアでは後者の地域が目立つ、という先行研究で得られた予察にある。それを実証的に裏付け、なぜそのような多様性が生まれたかを理論的に知りたいということから構想した。</p> <p>目的に応じて設定した二つの研究項目は順調に進展している。</p> <p>(1) 野外調査、標本解析等にもとづく実証研究（項目A）においては、新人文化形成プロセスの地理的変異を明らかにするためのデータベース構築と、各地の具体像を語るための定点的野外データ蓄積が飛躍的に進んだ。</p> <p>(2) 一方、地理的変異を説明するための理論研究（項目B）においては、「二重波モデル」という仮説を提案することができた。これは、ヒトの拡散と新たな文化形成は、二種類の波、すなわち、先住集団とは異なるニッチへの生態的侵入と、ニッチを問わない文化的侵入の組み合わせとして考察すべきであって、その変異は人口学的・生態学的・文化的パラメータによって説明できるとする仮説である。</p> <p>データ豊富なヨーロッパと西アジア一部地域の比較研究の結果、このモデルで、両者の新人文化形成過程の変異（西アジアにおけるはるかに長い形成過程）をうまく説明できる見通しが得られた。では、アジア他地域にみられる変異はどうか。本領域下半期においては、全ての計画研究を、その検証に向け収斂させていく所存である。</p>		

<p>科学研究費補助金審査部会における所見</p>	<p>A (研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの進展が認められる)</p>
	<p>本研究領域は、現生人類の成り立ちについて、考古学による発掘資料と文化人類学・現象数理学の手法を融合させ、文化という観点からの解釈・解明を目指したものである。</p> <p>これまでの成果として、発掘資料のデータベースを作成して石器技術についての地域ごとの定量比較を行い、ヨーロッパでの新人と旧人の速やかな交代と西アジアでの長期的な共存の後の旧人非居住地域への進出という二重波モデル、及び、いわゆる南回りのプロセスを実証的に明らかにしつつある。これらの点については、調査と研究が地道に進められており、研究成果が着実に蓄積されていると評価できる。また、組織の運営及び計画の遂行も順調である。日本における人文・社会科学系の研究で世界に伍しうる数少ない分野であり、その意義や期待は大きい。</p> <p>一方、今回のヒアリングでは、本研究の特色である、考古学と人類学・現象数理学との融合という点についてはやや不明瞭で、その達成は容易ではないと感じられた。生物・自然学的なモデルを文化的な尺度で解釈するには、例えば評価の基準をどこに求めるのかという点を考えても一筋縄ではいかないことが多い。また、文化人類学のデータは通常、共時的なものであるため、それを過去にどう投影させるのかという点も課題である。</p> <p>ただ、こうした点を差し引いても、全体的に見ればプロジェクトは順調に進展しており、今後、両分野の融合を含めた展開に期待したい。</p>